

# テイリッヒの本質主義理解

岩村太郎

「実存主義的哲学者の諸体系は、実存主義体系ではない」というテイリッヒの言葉は、これだけを見るならば何か不思議な感じがするのである。テイリッヒはこの時、実存主義という言葉に対して本質主義(essentialism)というものを意識し、対峙させていた。テイリッヒ自らこの本質主義という言葉はテイリッヒによる造語である、と語っている通り一般的には余りこの本質主義という言葉は広まっていなかったであろう。

そこで本稿の目的は、実存主義の裏返しの意味で用いられているテイリッヒの本質主義に対する理解を明らかにするものである。今日においてさえも私の知るところ、本質主義という言葉は学術用語としても余り知られてはいない。しかしながらテイリッヒほど万人に分かる仕方で、この実存主義に対立する本質主義を明確に意識していた哲学者そして神学者はいなかったのである。それゆえ実存主義を本当に知る上での前提条件ともなるべき基本的思想を、二十世紀の神学者テイリッヒに則してここで考察してみたい。

## 一. テイリッヒにおける二つの視点

テイリッヒは常に二つの視点、すなわち本質主義的視点と実存主義的視点、この両方を意識していた。そしてヨーロッパ哲学史において本質主義への反抗という意味で実存思想が生起してきた、あるいは当然起こるべくして台頭してきたと考える。本質主義とは最も単純に定義するならば、人間の本質を先取りして、基本的にはその本質を肯定的に見ることである。人間存在の本質的普遍

的構造を先づもって肯定する姿勢、フィシスへの基本的信頼と云っていいだろう。特にテイリッヒはその根をギリシア自然哲学者のパルメニデスに見ており、やがてアリストテレスそしてデカルトへと本質主義の一つの糸が繋がっていると考えた。これは人間の本質的善性(man's essential goodness)あるいは人間の本質的性格ないしは本性そのもの(man's essential nature)と考えていいであろう。

この本質主義に対してテイリッヒは、人間の実存状況(man's existential condition)を考えた。こうして初めて先にあげた「実存主義的哲学者の諸体系は、実存主義体系ではない」という言葉の意味も少しずつ明らかにされてきたと言えよう。すなわち、初めから体系として実存主義が存在したのではないこと、実存主義とはあくまでも問いの形式を指すのであって、問いは問いであっても決して体系的思想潮流ではないことを強調したいのであろう。つまり実存主義のもつ哲学的意味とは、本質主義の枠組みによって縛られていたのでは分からない人間の現実存在の意味を、再び問い直し問い返すこととなるのである。テイリッヒはこの意味では、非常に正統派であると言えよう。

以上の通り、テイリッヒにおいては常に二つの視点が存在していたことを初めに確認しておきたかった。本質主義と実存主義の対立緊張の上に、そしてこの二つの潮流の和解を求めようとするテイリッヒの遠大な意図も時おり感じられるのである。

## 二. ヨーロッパ哲学史に対する視点

哲学者であり、と同時に神学者であったテイリッヒには、その全思索活動の中で常に一貫しているテーマが存在した。それは「古典的ヒューマニズムとキリスト教の古典的伝統との総合と調停」と言えるものであった。そこからテイリッヒ神学が調停神学(mediating theology)と呼ばれる時、哲学と神学の曖昧な関係がそこにあるとやや皮肉混じりに批評されてきたことも事実である。けれどもテイリッヒは、「問う哲学と答える神学」という大きな基本的柱のようなものを自己の内にもっていた。そこで調停的といくら言われようとも、テイ

リッヒ自身はびくともしないのである。ギリシア以来の古典的ヒューマニズムとキリスト教の伝統、と言ってもキリスト教とは主にテイリッヒの場合プロテスタント神学の方を指している。古代ギリシア以来のヒューマニズムとプロテスタント神学の調停とは、これこそがまさに「偉大なる試み」と言えるものではないだろうか。テイリッヒ自身が持っていた野心的とも思えるほどの意図とは、おおよそ以上のようなものであった。

しかしながらヨーロッパ哲学史全体に対してテイリッヒは、一つの明確な視点をもっていた。それはドイツのロマン主義に対する情熱的とも思えるほどの積極的な評価である。テイリッヒの注目するロマン主義的態度とは「有限者における無限者の現存」というべきものであり、現存(presence)とは多分に内在的要素をもっており、この意味では神などの超越的実在も、何らかの仕方で個物に反映されるという傾向がテイリッヒには見られるのである。「絶対他者」として神を個物としての人間の直接の認識に入れないとする、いわゆるバルト神学的立場とは初めからかなり違っているのがテイリッヒであった。言葉を加えるならば、いわゆる啓蒙主義かロマン主義かと単純に問われた時、テイリッヒは明らかにロマン主義に荷担していることをここで再確認しておきたい。

さてテイリッヒは数あるロマン主義的思想の中で、ヘーゲルとシュライエルマッハーの二人に特に注目している。さらにどちらかと言って、やはりテイリッヒはヘーゲルこそ近代ヨーロッパ思想史の中心点として位置づけ、ヘーゲル思想全体のことを「偉大な総合」として高く評価するのである。そしてテイリッヒに従うならば、ヨーロッパ思想史は近代においてヘーゲルによって一つの完成を見た。古典ギリシア思想、キリスト教の古典的伝統、啓蒙主義そしてロマン主義など、ヨーロッパ思想はヘーゲルによってそのさまざまな要素が一つの思想としてヘーゲルにおいて完成されたとする見方なのである。さらにヘーゲルの歴史哲学における弁証法の発見や、宗教と政治、民族と国家などの体系的理解は、「偉大な総合」としてこれに優るものはないと考えるのであった。私自身の言葉で理解させていただくならば、ドイツ観念論の伝統の中で、「歴史は分かるものである。それゆえ歴史は分かるものであらねばならない」ということになったのである。何とヘーゲルにおいては、「絶対精神」までもが平気で分かるものとなってしまった。こうなるともう何でも分かってしまうよう

である。

以上はヘーゲルに対する肯定的な評価であったがしかし、テイリッヒはヘーゲル思想の危険性と同時にその限界にも気づいていたのである。その危険性とは、流動的であるはずの歴史がヘーゲルにおいて完結してしまっていること。つまり歴史が全て解決済みとなっていること。すなわちここが歴史の魅力となるはずの「未来開放性」を失っていること、これらの危険性をテイリッヒは考えていた。全てが分かってしまったヘーゲルにとって、人間の地位は著しく向上したと考えられているのである。テイリッヒはこの逆転状況を、人間を神の王座にすわらせるものであるという認識から、人間の高慢(hubris)として表現し、特にこのヒュブリスというギリシア語の意味をヒュブリスという語がギリシア悲劇の中で本来使われていた意味内容に立ち戻って、「神的領域への自己栄光化(self-elevation toward the realm of the divine)」<sup>2)</sup> と的確に指摘している。

歴史の中でさまざまに起きてくる現実的なものの一つ一つにヘーゲルは「絶対精神」の自己実現を認めた。目前にある、あるがままの現実のその非合理性にもかかわらず、その内に作用している摂理的なものをヘーゲルは認めてしまうのである。この点においてはヘーゲル歴史哲学は、いわゆるキリスト教的な摂理理解と一致しているのである。逆説的摂理信仰と考えてもいいであろうか。それとも「理性の狡智(List der Vernunft)」とは、そもそもキリスト教の歴史観を高度に世俗化したものである、と解釈することもできるのではないであろうか。このようにテイリッヒは、ヘーゲル思想を「偉大な総合」としながらも、その危険性と思想のもつ限界を悟って行ったと言えるであろう。

では次にヘーゲル思想の限界は、一体どこに示されているのであろうか。テイリッヒはこの点に関しても明確な視点を一つもっていたのである。それはヨーロッパの近代思想史とは、一言で言うならば「ヘーゲル思想の破綻の歴史」ととらえていたのである。いわばヘーゲルとは思想史の終わりであって、新しい始まりの序曲となったとする理解なのである。シュライエルマッハーとヘーゲルをそれぞれ偉大なる総合者としながらも、特にヘーゲル思想の網の目から漏れていた諸要素を中心にして、ヨーロッパ近代史を見ようとするのがテイリッヒの視点と言えよう。一つの偉大すぎたものが、やがて限界を見て崩壊し破

綻して行く過程として近代思想史を眺めている。この過程とは、膨脹しすぎた国家帝国が分裂し崩壊して行く過程にどこか似てはいないであろうか。

### 三. ヘーゲルの「偉大な総合」の破綻

ヘーゲル哲学を頂点として、やがてさまざまな思想潮流が出てきたとするテイリッヒは、主に三つの思想をとりあげている。先づ第一に本質主義に対する反抗としての実存主義。そして第二番目に、フォイエルバッハそしてマルクスへと続く唯物論(materialism)、第三番目に、ショーペンハウアーからニーチェに受け継がれた主意主義(voluntarism)、これら三つの思想こそヘーゲル思想の終焉の結果としてもたらされたものであるとテイリッヒは考えるのであった。実存主義、唯物論哲学そして主意主義の発生とは、これらは全て暗にヘーゲル思想に対する反抗から歴史に登場してきたものであり、やがてこの三つの思想潮流が十九世紀後半の主流派を形成して行ったのである。ヘーゲル思想の総合と破綻の歴史こそ、テイリッヒが「ヨーロッパ近代思想史」と呼びたかったものである。

実存主義思想がいかにして評価されるべきかは、本稿のテーマに直接沿うものである。この点に関しては後に詳しく論述することとして、ここでは唯物論と主意主義の発生に対して、テイリッヒ自身がどのような見解をもっていたのかを、やや大づかみにとらえておきたい。

「さてわれわれは、ヘーゲルとフォイエルバッハに対するマルクスの関係から出発しなければならない。彼はヘーゲルの弟子であった。ヘーゲルのもう一人の弟子であるフォイエルバッハは、マルクスがいうように、自分で逆立ちしていたヘーゲルをもう一度ひっくり返して元に戻した。ヘーゲルは、現実には哲学者の頭脳と一致すると信じた」。<sup>3)</sup> 「キルケゴールと同様に、マルクスはブルジョワ社会の社会構造のなかでの人間の疎外状況について語る。彼は疎外(Entfremdung)という言葉を用いて、個人の観点からではなく社会の観点から使う。ヘーゲルにおいて疎外は、絶対精神が自然へと出て行き、自己から疎外されることを意味する」。<sup>4)</sup> この引用で明らかかなように、現実には決して哲学者の頭脳と

一致するものではありえないし、社会の中における個の疎外の問題は産業社会の中において益々深刻なものであるとの認識から、マルクス主義哲学は必然的に登場してくる、というのがティリッヒの見解である。解決しえない矛盾点を、さらに経済社会の中での視点を加えつつ克服しようとした思想こそ、ティリッヒの評価するマルクス主義哲学だったのである。さらに次に、ショーペンハウアーからニーチェへと続く主意主義の路線、そしてこれはやがて生の哲学へと発展するのであるが、この意志を哲学の中心課題とする思想潮流もヘーゲル哲学の崩壊の結果とティリッヒはとらえるのである。ティリッヒの名を一段と高めた『生きる勇気(*The Courage to Be*)』と題された書物にも「勇気」という主意主義的な言葉が光っている。この場合の勇気とは、人間が無、すなわち非存在の脅かしに会いながらも、それにもかかわらず自己の存在を肯定しようとする意志を意味しており、ティリッヒ自身が強く主意主義の伝統を高く評価していたこともうかがえる。「ショーペンハウアーは、多くの人びとのなかでヘーゲルの進歩主義的楽観主義を克服し、二十世紀の実存主義的悲観主義を準備した人とみなされるべきである」。<sup>5)</sup>とあるように、ショーペンハウアーにおける「意志」とは、決して理解可能な合理的なものではなかったのである。ヘーゲルとは根本理解において、決して相容れるものではなかった。盲目的意志は次々と新たなるものを欲求し、それゆえ休息を知らない。最終的には、仏教的禁欲という意志の否定、脱却を試みなければならなくなってしまう。そうしなければ究極的平安へは到ることができない、という一種の悲観主義となってしまうのであった。この悲観的結末の中に、ティリッヒは皮肉なことに反ヘーゲル思想の一面を見ている。そしてティリッヒは同様の眼をもって、ニーチェの「力への意志」という標語においても、人間のもつ内的生命力を、すなわち理性では決して把握できない領域を示した点で、やはりこれもヘーゲル思想を克服するものである、と考えこの意味で高く評価しているのである。

「偉大な総合」の破綻史として近代ヨーロッパ思想を見ようとするティリッヒの視点を、以上概観してきた。マルクス主義的な唯物史観にティリッヒが決してくみするものではないことは言うまでもないが、ともかくヘーゲル哲学の崩壊以後、実存主義、唯物論そして主意主義の三つが出現してきたとティリッヒは結論づける。そして後述するティリッヒ独特の実存主義理解と、主意主義

的発想の二つが、ティリッヒ思想を決定的に方向づけたと言えよう。

これまでのところを要約するならば、啓蒙主義の一面性を克服し「有限者における無限者の現存」という思惟に到達したシェライエルマッハーのロマン主義を高く評価しつつ、ヘーゲル哲学の偉大さを十分に認めながらも、その網の目からこぼれた視点、すなわち理性的思惟のみでは決して解決しえない問題点にティリッヒは徐々に気づいていった、とまとめられるのである。

#### 四. ヘーゲルの本質主義哲学の特徴

「ヘーゲルは、神を万物の本質的構造の担い手として見る。これは彼を本質主義哲学の偉大な代表者たらしめる。この場合、本質主義哲学とは、万物における諸本質を時間と空間における神的自己顕現の表現として理解しようとする哲学を意味する。のちの実存主義哲学は、この本質主義哲学に対する反動としてのみ理解されうる。近代実存主義は、ヘーゲルの本質主義に対する抗議として生まれた。それゆえに、実存主義を理解するためにも、万物の諸本質を神的生命の顕現として見るヘーゲルの本質主義を理解しなければならない。あらゆる種類の植物や動物、原子や星の本質、人間の本性——この本性において、人間の内奥の中心があらわとなる——、これら万物の本質的構造は神のなかに含まれている。これらすべては、時間と空間においてあらわとなる神的生命の顕現なのである」。<sup>6)</sup>

ティリッヒのもっている基本的なヘーゲル像とは、だいたい以上のようなものである。けれども次に、やや感情的とも思えるほどのティリッヒによるヘーゲル批判を引用してみたい。「この土台の上に、ヘーゲルは、非常に聡明な哲学者たちによってひどく誤用され誤解され攻撃された言葉を述べた。それは、現実的なものはすべて理性的であるという言葉である。八歳の少年なら誰でも、現実的なものがすべて理性的ではないことを知っている。しかし、十九世紀の終わりに哲学者たちがありったけの知恵をしぼってヘーゲルを斥ける道を示すようになるまで六十年を要した」。<sup>7)</sup> このようにティリッヒのヘーゲル批判は、益々エスカレートするのである。ヘーゲル哲学を克服するまでにかかった六十

年というものを、はっきりとした形で確定することは難しいとは思いますが、少なくとも十九世紀の終わりに到ってヘーゲルの影響を脱してヨーロッパ近代が本当の意味で始まった、とテイリッヒは暗に言いたいのであろう。

何よりもテイリッヒはヘーゲルを、本質主義者として決めつける。なぜならばヘーゲルは、矛盾だらけのはずの世界を、そこは本質存在の適切なる表現の場である、と強く信念のように考えていたからである。現実存在そのものが、本質存在の体系の枠組みの中でとらえられてしまっている。「実存が、本質の中で解消されている」と言っているであろう。こうして初めて「現にあるがままの現実の世界が合理的なものである」という結論が導き出されてくる。さらに実存が本質の必然的表現で本当にあるならば、世界史とは全くもって人間の頭をもってしてさえも、十分に理解可能なものとなるのである。絶対精神の歴史の中での自己実現とは、テイリッヒから見れば以上のように考えられるであろう。

ある一つの歴史哲学なり歴史観的学問体系を、余りにも矛盾のないもの、矛盾のない整合性をもったものに仕上げすぎてしまったために、逆にヘーゲルは道に迷って行かざるをえないことになったとのテイリッヒの見方なのである。矛盾のない学問体系を目指すこと自体は、何らの問題もないであろうし、むしろそうすることが哲学者としてとるべき当然の態度である。しかしこの点においてテイリッヒはヘーゲルの「勇み足」を見る。気が逸ったために、ヘーゲルは全ての実存を「本質存在」によって、くくってしまったというのである。

このようにテイリッヒは、ヘーゲルにおいてヨーロッパ哲学の本質主義が頂点に到っていると断定する。全てが「分かる」ものとなってしまった上に、世界史の行程そのものも正当化されるものとなってしまった。われわれ人間は、一方的に歴史を「見る側」にまわってしまい、当然ながら歴史は「見られる側」となったのである。近代的な「主観の絶対的優位」というものを、テイリッヒはヘーゲルにこそ見い出そうとしているのかもしれない。さらに主観性優位の歴史観を、神的領域への自己栄光化、すなわち神の座に人間が立ちつつ、全てを理解し全てを把握できるという、非常に危険な思想とみなすのであった。ドイツ人であったテイリッヒにとって、ヘーゲルが尊敬の対象であり続けたことは疑う余地もない。それにもかかわらず、どうしてもテイリッヒはヘーゲルの



本質主義にはくみしないのであった。

ヘーゲルの本質主義哲学の特徴を、以上のように見てきた。いかなる場合においてもティリッヒは、基本的な二つの態度、すなわち本質主義的態度と実存主義的態度の二つを意識していた。そしてこの視点によって全てを自分なりにとらえようとしていた、と考えていいであろう。ヘーゲルはティリッヒによって、「本質主義者」と決めつけられてしまったのである。

## 五. 本質主義に反抗するものとしての、ティリッヒの実存主義理解

ヘーゲルの「偉大な総合」が破綻した後、実存主義、唯物論哲学そして主意主義の三つが登場してきたとするティリッヒの基本的な考え方について、これまでも述べてきたつもりである。その中でも本章においては、特にいかにしてティリッヒが実存主義をとらえていたかについて考察を加えてみたい。本質主義と実存主義とは、まさに表裏をなすものであって、そのどちらの視点を欠いてもならないのである。

本稿の冒頭に掲げられている言葉、すなわち「実存主義的哲学者の諸体系は、実存主義体系ではない」という、やや強引なティリッヒの解釈も、少しずつ明らかにされてきたと思う。つまり実存主義とは、実存主義単独でとらえられるべきものではありえないし、実存思想そのものを問うたところで、本当の問いには到らない、実存を問うその前提にあるものとしての本質主義を理解することが、同時になされるべきである、とティリッヒは主張しているのである。こうして初めて先の言葉の意味が明らかとなる。つまり実存主義的哲学者の諸体系とは、実存主義体系からくるのではなく、それは本質主義哲学の体系からはずれてはみ出たものから来ている、ということなのであろう。本質主義によっては網羅しきれなかった部分を基調にして、そこから実存主義をとらえること、この視点こそがティリッヒの独自の考え方である、と言えるのである。

ティリッヒにとって実存主義とは、初めから一つにまとまった哲学体系ではなく、あくまでも一つの問いの形式であると考えていたことは、以上見てきた通りである。この点をなお一層明らかにするものとして次の言葉をあげておき

たい。「実存主義者たちが答えを与えようとする時、いつもその答えは、実存主義者としてのかれらの分析からは導出されない宗教的ないし疑似宗教的伝統 (religious or quasi-religious traditions) によるものである」。<sup>8)</sup> 問う哲学と答える神学という明確な区分をしていたティリッヒにとって、そしてさらに答えをもたない単なる問いを発するにすぎない立場をニヒリズムとして斥けるティリッヒにとって、答えを導き出しえない問いとは全くもって空しいものであった。自らの神学を「答える神学(answering theology)」として位置づけるティリッヒにとって、これは当然のことであったのであろう。今世紀という意味喪失の危機にさらされている現代人に対しての、精一杯のティリッヒの誠意をここに確認することが私はできると思う。

それならば実存主義思想に根差して問いを発する哲学者たちは、一体どこかち答えを導き出そうとしていたのか、ティリッヒは少なくともどのように考えていたかについて、この点は大変に興味深いものがある。ティリッヒは次のように考えた。<sup>9)</sup> パスカルはアウグスティヌスの神学思想から、キルケゴールはルター派の神学から、マルセルは中世トミズムから、そしてドストエフスキーはギリシア正教会の伝統から、と並べられる通り、彼らは自己の問いを問いとは別の角度から答えようとしていた、とティリッヒは判断している。では以上あげた思想家とちがって、無神論的立場をとっていた実存主義思想家たちについてはどうであろうか。ティリッヒは、例えばサルトル、ニーチェ、ハイデガー、ヤスパースそしてマルクスさえも、問いに対する答えを「ヒューマニズムの伝統」に求めていたのである、と考えるのであった。そしてこのヒューマニズムの伝統とは、実は「隠された宗教的根源(hidden religious sources)」に基づくものであると考えられ、ここでもティリッヒが宗教的深みの次元を追求しようとした意図が見られる。けれどもまさにこの点のみをとらえて、そしてティリッヒに対して余り好意的でないキリスト教ドグマティストたちは、ティリッヒは正統派神学ではなく、むしろその立場は汎神論に近いものが感じられる、などとティリッヒは皮肉られ酷評されているのも事実として覚えておかなければならない。しかしながら本稿においては、いわゆる狭義のキリスト教理解よりもティリッヒのスタンスがやや広いことのみを認めて、あえてこの問題には立ち入らないこととしたい。それよりも「問う哲学から、答える神学へ」とい

う強いメシア的コンプレックスをもってティリッヒが苦闘していた点を高く評価して行きたい。

そもそも「実存の問いを回避することは、不可能である」と考えていたティリッヒにとって、実存主義は生涯のテーマであり続けた。そしてその端緒をヘーゲルの本質主義に反抗するものとして位置づけ、さらにこの実存主義は今日に到るまで「問いの形式」として受け継がれている。実存主義的視点の大本をたどれば、旧約聖書の『創世記』にある通り、人間が原罪を犯すことにより神から離反して行った事実、そしてプラトンによってなされたイデア界と現象界の区別、区別と言うよりもこの二者間のズレの自覚、そしてこれらの根本思想はアウグスティヌスによって体系化されていった。ヘーゲルの本質主義に対して、はっきりと反抗を企てる以前に、そのはるか昔から「要素」としての実存主義は、歴史上に存在していたのである。そしてその要素と視点は、反ヘーゲル主義の一つの潮流として近代以降、大きく花開いたとティリッヒは見なすのであった。<sup>10)</sup>

元々は要素、要因としてしか存在しえなかった実存主義思想は、ヘーゲルの本質主義哲学の行きすぎにより、一気に広がり、それはまさにヘーゲル哲学に対する反抗の象徴とさえなった。それが二十世紀に到って一種のスタイル、実存主義的スタイルという特有の問いの発し方となり、現在に到っている。要素として、反抗として、そしてスタイルとして生き続ける実存主義というものを、ティリッヒはあくまでもヘーゲルの本質主義を視点として据えて見ていたのである。

## 六. ティリッヒの本質主義理解

本稿を閉じるに当り、まとめに代えて本稿の結論をここで要約してみたい。そしてそれが実存思想をとらえる上での、新たな視点となれば幸いである。

先づ初めにティリッヒは本質主義的哲学の萌芽を、古代ギリシアのパルメニデスに見ていた。「存在するものは、存在する」。「存在しないものは、存在しない」。この最も単純明解なテーゼにより、非存在を否定し、現象に対する本

質存在の絶対的優位をパルメニデスは説いた。ロゴスのみを絶対基準とする、言うなればイデア優位の立場である。パルメニデス自身は、もちろん自己の自然哲学を「本質主義」などとは考えもしなかったのではあるが、少なくともイデア的本質存在にのみ注目し、やはり現象は歪んで不完全で空虚なものとして斥けられている。まさにこの点こそ、テイリッヒから見ると「本質主義」なのであった。

これと全く同じことを、二千年以上も後のヘーゲル哲学の中にテイリッヒは見つける。実存する世界を、本質存在の適切なる表現の場であるとし、実存を本質の中に解消してしまっただのである。ヘーゲルの場合はパルメニデスとちがひ、現象としてある現実存在を、本質の枠組みの中にくくって入れてしまったのであるが、どちらにせよ本質優位に立つ点で、やはりテイリッヒから見るとパルメニデスもヘーゲルも同じなのであった。

やがてヘーゲルの歴史哲学は、さまざまな角度から攻撃される。テイリッヒはその反抗の象徴的思想潮流として、実存主義、唯物論哲学そして主意主義の三つをあげている。そしてヘーゲル思想が破綻する過程の中に、近代思想が始まるダイナミックな動きを見ているのである。すなわちヘーゲル中心のヨーロッパ近代思想を展開している、と結論づけていいであろう。

テイリッヒはヘーゲルを「本質主義者」と決めつけ、この本質主義哲学の崩壊の中から実存主義をとらえた。すなわちヘーゲルの本質主義哲学なしには、決して実存主義思想は本当の意味で歴史に登場しなかった、と考えるのである。本稿の目的は、このヘーゲルの本質主義哲学を明らかにした後、いかにして実存主義思想が出てきたかについての考察を加えるものであった。最後に今後の研究課題として、ヘーゲルについてのより深い理解、そしてテイリッヒを現代思想からながめ再評価すること、この二点を指摘し本稿を閉じたい。

## 註

- 1) ティリッヒ博士講演集『文化と宗教』高木八尺編訳、岩波書店、1962年、97頁。
- 2) 『ティリッヒ著作集』別巻三、佐藤敏夫訳、白水社、1980年、159頁。
- 3) 前掲書、241頁。
- 4) 前掲書、244頁。
- 5) 前掲書、260－1頁。
- 6) 前掲書、164頁。
- 7) 前掲書、176頁。
- 8) Tillich, Paul, *Systematic Theology*, vol. II, SCM Press, 1957, p. 25.
- 9) *Ibid.*, pp. 24－6. 本質主義と実存主義の関係が、この箇所でも最も明確に定義されている。
- 10) 『ティリッヒ著作集』第九巻、大木英夫訳、白水社、1978年、139頁。